

Title	鑑鏡の研究(梅原末治著, 大岡山書店発行)
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1926
Jtitle	史学 Vol.5, No.1 (1926. 3) ,p.145- 145
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19260300-0145

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

鑑鏡の研究(梅原末治著) (大同山書店發行)

本書は「古鏡の研究」の著者故富岡謙藏氏の七周忌を記念するために、氏と師弟の關係ある梅原氏が、かつて公にしたる論文に補訂を加へて公刊せるものであつて、その序文にも言へることく、富岡氏の生前樹立したる鑑鏡の年代觀を更に新出の資料によつて祖述修築することを志したのであるから、この意味において富岡氏の著書と姉妹書の關係をなすものといふことができる。従つて富岡氏の年代觀の一部に對する諸學者の異說に對して、いたるところこれが辯護と論戰とにとめられた、鏡の研究に新生面を開いたものである。例へば中山博士が所謂王莽鏡の形式の行はれたる期間を短く限り、方格規矩四神鏡即ち王莽鏡と斷ずる見解、或は高橋博士が漢代鏡中單に王氏作鏡の銘あるものを王莽鏡と前提して、其他の神獸畫象鏡に王氏作鏡とあるものも同様當代のものとする見解の根據薄弱なる所以を種々の方面から論證し、むしろそれらは漢末魏晉の時代に、比定すべきものなることを主張された。しかしながら本書の特色は單にその年代觀においてばかりではない。富岡氏の著書にみられなかつた朝鮮出土の古鏡の研究やまた古鏡研究からひいてわが古代文化に論及せる點も注意すべき

ものである。この點において最も興味あるものは、附録の「考古學上より觀たる上代日鮮の關係」であつて、これは通俗的講演の要項ではあるけれども、氏の考古學研究より得たるわが古代文化の綜合的觀察をみることにでき、この方面に對して多くの示唆を興ふるものである。その要旨を紹介すれば、石器時代の我々の祖先は朝鮮半島の民衆と共に同代の文化状態にあつたが、隣邦支那の漢民族の發展につれてその文化の影響をうけ、銅鐸、銅劍、銅鉞などの遺物の示す文化が朝鮮を経て内地に傳はり、畿内を中心とする銅鐸の盛んな製作となつて、その地域から遂に前方後圓墳なる墓制に依つて代表せらるゝ國家が成立するに至つたといふのである。

要するに鑑鏡の研究はそれ自身工藝美術史の上に重要な地位を占むるのみならず、その製作年代、その出土分布、その圖樣等が、文献以外に遺物のすくなきわが古代の文化研究に對し、特に至大の貢獻を興ふるものであつて、最近これらの研究によつて大問題が提起され、學界に大論争を惹起したほどであつた。本書は古代史研究者にとつての必讀の書であつて、近く公刊されようとする同氏の銅鐸の研究と共に、わが學界を飾る近來の快著といふべきである。(松本芳夫)

書誌(書物同好會編輯)

書物を愛して讀むもの會として、書物同好會はその機關雜誌として「書誌」第一冊、第二冊が發行せられてゐる。第一冊では口